

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

西村 富美子

後漢一代の歴史を記した『後漢書』は紀伝体の史書であるが、中国のいわゆる二十四史と言われる先行の史書『史記』『漢書』とはかなり構成の異なるところがある。特に列伝の設け方において顕著であり、先行の両書を踏襲しつつ幾つかの新項目を立てている。恐らく著者范曄が編纂に際して時代性に即した史書の編纂を意識したためであったと考えられる。この発想はかなり勇気を要する決断であったが画期的なことであり、専門家の意見を問わねばならないが以後の史書の編纂方法に大きな影響を与えた。

その新しい項目のなかで筆者が最も惹かれたのは「方術」「逸民」の二つの列伝項目である。「方術」及び「逸民」という項目にはいかなる人が名を連ねているのか、同時に社会からは逸脱した人また実態が明白に把握できぬことを業とする人、さらには儒教の世界では特殊な人、を後世に残る正史のなかに収録することは、その存在を社会的に認知することにつながるのではないか、などの疑問があったからである。これらの疑問解明に一步でも近づこうというのがこの小論の意図である。

○

この二つの列伝項目について、先に簡単にその概容を述べておく

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

らば、「方術列伝」は卷八十二上下・列伝第七十二上下、「逸民列伝」は卷八十三・列伝第七十三に収録されている。その両列伝に収める者の名を次に挙げておけば、

方術列伝・上（序）

楊由	李南	李邵	段駱	廖扶	折像	樊英	論
唐檀	公沙穆	許曼	趙彦	樊志張	單颺	韓說	
董扶	郭玉	華佗	徐登	費長房	荀子訓	劉根	
左慈	計子勲	上成公	解奴辜	張詔	趙聖卿	編盲意	
寿光侯	甘始	東郭延年	封君達	王真	郝孟節	王和平	贊

と、(上)には約十三人、(下)には約二十八人の伝記を載せる。そして(上)の最初、つまり巻頭に「序」、巻尾に「論」があり、(下)の巻尾には「贊」を記している。また伝記の文は、下巻に収める華佗のように極めて長文のもの、また下巻の計子勲、上成公、解奴辜、張詔、趙聖卿、編盲意などのように極めて短いものもある。

逸民列伝

(論)	野王二老	向長	逢萌	周党	王霸	嚴光
井丹	梁鴻	高鳳	台佟	韓康	矯慎	戴良
法真	漢陰老父	陳留老父	龐公	贊		

と、十七人の伝記を載せる。伝記の文の長短は「方術列伝」ほどではなく、梁鴻を除けばほぼ均等であり、巻頭に「論」、巻尾に「贊」を載せるが、高鳳の伝記のところに編者の范曄の父である范泰の「隠

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

逸」について述べた「論」を付している。^{ほろ}

なお両伝ともに（一）を付した（序）、（論）については、『後漢書』は『序』『論』とは記していない。「方術列伝」は、巻尾に「論」があるので仮に『序』、「逸民列伝」は後に述べるように『文選』の「史論」の部類に収めているので、『論』としたものであることを断っておく。

中国のいわゆる正史と言われる二十四史のなかで、「方術」「逸民」を列伝の項目として初めて挙げたのは『後漢書』である。先に述べたように、『後漢書』に先立つ正史に『史記』及び『漢書』があるが、この二つの史書には「方術」「逸民」という独立の列伝項目は見えない。これに類する人物の伝記は別の列伝の中に含まれている。ちなみに、『史記』には、「滑稽」「日者」「龜策」の列伝があるが、以後の正史はこの三つの列伝項目を受け継いではいない。『史記』巻百三十「太史公自序」に各巻の内容を簡単に記述しているが、この三つの列伝について

◎世俗に流れず、執利を争わず、上下凝滞する所無く、人の之れを害する莫く、道を以て之れを用う。滑稽列伝第六十六を作る。

◎齊・楚・秦・趙の日者為るもの、各おの俗の用いる所有り。其の主旨を循観せんと欲し、日者列伝第六十七を作る

◎三王龜を同じくせず、四夷各おのトを異にするも、然れども各おの以て吉凶を決す。略ぼ其の要を闡い、龜策列伝第六十八を作る。

と、内容の要旨を述べる。

また古代の名医、扁鵲（黄帝時代、姓は秦、名は越人）・倉公（前漢の呂后（文帝、淳于意）の列伝があり、同じく「自序」には

◎扁鵲 医を言い、方者の宗たり。数を守ること精明、後世循序して、易う能わざるなり、而して倉公之れに近しと謂うべし。

扁鵲倉公列伝第四十五を作る。

と、司馬遷は述べる。

これらの四つの列伝は、『史記』の立てた項目だが、「滑稽」以外は後々の正史に名称を変えて受け継がれている。すなわち「日者」「龜策」「扁鵲倉公」は「方術」という列伝の項目によって卜筮や医学を事とする人たちの伝記としてまとめられ、その項目にふさわしいものたちが名を連ねている。

『史記』に次ぐ『漢書』は、列伝の項目に新しい項目を立てずに、先に挙げた『史記』の三つの「滑稽」「日者」「龜策」列伝以外は、ほぼ『史記』の項目を踏襲している。こうした項目の設け方に新機軸を出したのは『後漢書』であった。『後漢書』は南朝宋の范曄の編纂にかかわるものであり、その成立は次代の歴史を記した西晋の陳寿の編纂にかかわる正史『三国志』の後なのだが、成立は前後するものの正史の項目に関しては実に画期的なものである。

すなわち『後漢書』は「方術」「逸民」以外にも新しい項目を設けており、それらの項目は以後の正史に引き継がれていく。「方術」「逸民」以外の新しい項目には、宦官の伝記である「宦者列伝」、「儒林列伝」とは別に「文苑列伝」、すぐれた個人の行為を記す「独行列伝」、後世の範となる女性の伝記である「列女列伝」などがある。個人の伝記以外にこうした独自の項目名を立てることに關して、『後漢書』は『史記』『漢書』の先行の正史とは異なる観点に立ち、変化する時代の社会相に適應した項目を設けるという発想のもとに、こうした新項目を發案したのであろう。また『史記』『漢書』が「外戚世家」あるいは「外戚列伝」としていた後宮關係の記録を「本紀」に列して「皇后紀」とした。これは後々受け継がれず『後漢書』だけなのだが、その当時の後宮、外戚の実状がその背景にあることは容易に推察される。

さらに注目すべきことは、こうした『後漢書』の新しい観点また発想は当時極めて高い評価を得ていたようである。すなわち梁の昭明太子が中心となって編纂された中国初の詞華集『文選』のなかに、この『後漢書』の新項目關連の文が收録されていることによって分かる

のではないだろうか。新項目が設けられたその理由、また内容、定義に近い解説の「論」は、項目に対する編者の見解を示すものとして受け取られ、注目に値するものとして『文選』に収められたのであろう。そこで『文選』に収録される范曄の「論」(項目)を挙げておくならば、

卷四十九 史論上 「范蔚宗後漢書皇后紀論一首」(『後漢書』

卷十・上下)

卷五十 史論下

「范蔚宗後漢書二十八將伝論一首」(『後漢書』卷二十二朱景王杜馬劉傳堅馬列伝第十二の後に付す)

「宦者伝論一首」(卷七十八列伝第六十八)

「逸民伝論一首」(卷八十三列伝第七十三)

史述賛 「范蔚宗後漢書光武紀賛一首」(卷一下光武帝紀第二下)

の五篇である。ちなみに『文選』卷四十九・卷五十の「史論」上下には、九篇の作品が収められているが、うち四篇が范曄の『後漢書』の「論」であり、『後漢書』の新項目がいかに重要視されたかを示すものであろう。

さて、右に述べたように、「方術」は「史記」にもそのルーツを求めることができるが、もう一つの「逸民」は「史記」にも「漢書」にも、項目のルーツらしきものを見出すことはできない。

そこで『逸民』という語、併せて『方術』という語のルーツを考えてみると、「逸民」は『論語』微子篇に見えるのが最初である。

逸民は、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。子曰く、その志を降さず、其の身を辱めざるは、伯夷・叔齊か。柳下惠・少連を謂う、志を降し身を辱む。言は倫に中り、行は慮に中る。其れ斯のみ。虞仲 夷逸を謂う、隠居して言を放く。身は清に中り、廃は権に中る。我は則ち是に異なり。可も無く不可も無し

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

と。

そして何晏の注には「逸民は、節行の超越なる者」とある。孔子は、逸民として、伯夷・叔齊・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連の七人を認定したのである。伯夷・叔齊が『史記』卷六十一に「伯夷列伝」がある以外には、他の五人に確たる列伝の項目を挙げるのは難しい。

ところで、『後漢書』以後、「方術」「逸民」という列伝の流れはいちおう受け継がれていくが、この二つの名称は列伝の名称としては受け継がれてはいかない。その背景には何か理由があるのか無いのか、現在は推論の段階に過ぎず明白な確証が得られないでいるが、列伝の名称として「方術」「逸民」を用いるのは、むしろ『後漢書』だけなのである。

二十四史のなかで、「方術」「逸民」という列伝の名称がどう変化するかを述べておけば、先に指摘したようにこの二つは二十四史のなかにあつてはむしろ特殊である。二十四史のなかで「方術」系の列伝を有する史書は十五種を数えるが、「方技」列伝が大半であり、「芸術」列伝が四種とそれに次ぎ、「術芸」が一種である。「逸民」系の列伝はやはり十五を数えるが、「隱逸」列伝がほとんどで、「高逸」「処士」「逸士」の各列伝がそれぞれ一書ずつ使われている。

「隱逸」の語は、『漢書』卷八十六、何武伝に、「行いに茂異有り、民に隱逸有り」と見えるのが初めて、『後漢書』には何カ所かに使われている。「処士」は、『孟子』滕文公篇に「諸侯は放恣、処士は横議」、また『荀子』非十二子篇に「古えの所謂処士なる者は、徳盛んなる者なり」とあり、「逸士」は、潘岳の「西征の賦」(『文選』卷十)に、「山潜の逸士の、卓として長く往きて反らざるを悟る。」と見える。

次に「方術」の語については、『莊子』天下篇に「天下の方術を治むる者多し」や、『荀子』堯問篇に「方術用いず」などと見える語だが、「方技」の語は、『漢書』卷九十九、王莽伝などにあるが「方術」の語のほうがその歴史は古いようである。

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

○二十四史の「方術列伝」及び「逸民列伝」

それでは、次に二十四史の中で「方術」「逸民」の各列伝がどのよ

うに受け継がれているかを示すために、二十四史の史書を整理して示しておく。(列伝名の下に数字は、その列伝に収められた人数を表す)

書名	巻数	編者	方技列伝	隱逸列伝
一 史記	百三十卷	漢・司馬遷		
二 漢書	百二十卷	後漢・班固		
三 後漢書	百二十卷	宋・范曄、晋・司馬彪	○卷八二・上下方術(13・21)	○卷八三・逸民(17)
四 三国志	六十五卷	晋・陳寿	○卷二九(7)	
魏志				
吳志・蜀志				
五 晋書	百三十卷	唐・房玄齡等	○卷九五・芸術(24)	○卷九四(40)
六 宋書	百卷	梁・沈約		○卷九三(22)
七 南齊書	五十九卷	梁・蕭子顯		○卷五四・高逸(17)
八 梁書	五十六卷	唐・姚思廉		○卷五一・処士(14)
九 陳書	三十六卷	々		
一〇 後魏書	百十四卷	北齊・魏収	○卷九一・術芸(26)	○卷九〇・逸士(4)
一一 北齊書	五十卷	唐・李百葉	○卷四九・(13)	
一二 周書	五十卷	唐・令狐德棻等	○卷四七・芸術(9)	
一三 隋書	八十五卷	唐・魏徵	○卷七八・芸術(14)	○卷七七(5)
一四 南史	八十卷	唐・李延寿		○卷七五・七六(30・22)
一五 北史	百卷	々	○卷八九・卷九〇・芸術(46・26)	○卷八八(7)
一六 旧唐書	二百卷	後晋・劉昫	○卷一九一(30)	○卷一九二(21)
一七 新唐書	二百二十五卷	宋・歐陽脩等	○卷二〇四(22)	○卷一九六(25)
一八 旧五代史	百五十二卷	宋・薛居正等		
一九 新五代史	七十五卷	宋・歐陽脩		
二〇 宋史	四百九十六卷	元・托克托	○卷四六一・四六二(18・19)	○卷四五七・四五八・四五九(12・21・10)
二一 遼史	百十六卷	々	○卷一〇八(5)	
二二 金史	百三十五卷	々	○卷一三一(10)	○卷一二七(12)
二三 元史	二百十卷	明・宋濂	○卷二〇三(4)	○卷一九九(6)
二四 明史	三百三十六卷	清・張廷玉	○卷二九九(25)	○卷二九八(12)

○『後漢書』逸民伝論

先に述べたように、この「逸民列伝」の「論」は、『文選』卷五十、「史論」下に収められている。また『後漢書』は、この巻頭の文は「論に曰く……」ではなく、『文選』の部類名であることは先に述べたとおりである。他の『後漢書』から収録する「史論」の部の「宦者伝論」、「二十八將伝論」についても同様である。

さてこの『後漢書』、『文選』の両書に収められる「逸民列傳」の論とはどのようなものか、「逸民」をどのように説明しているのか、を知るために、まず「論」を挙げておく。

(一) 易に称す、「遯の時義は大なるかな」と。又た曰く、「王侯に事えず、其の事を高尚にす」と。是を以て堯は天に則ると称するも、潁陽の高きを屈せず①、武は美を尽くせるも、終に孤竹の藜を全うす②。茲より以降、風流弥いよ繁く、長往の軌未だ殊ならず、而るに感致の数は一に匪ず。或ものは隱居して以て其の志を求め③、或ものは回避して以て其の道を全うし④、或ものは己を静かにして以て其の躁を鎮め⑤、或ものは危きを去りて以て其の安きを図り⑥、或ものは俗を垢として以て其の繁を動かし⑦、或ものは物を疵として以て其の清を激す⑧。然れども其の畎畝の中に甘心し⑨、江海の上に憔悴するを觀るに、豈必ずしも魚鳥に親しみ林草を楽しむならんや。亦た云に性分の至る所のみ。故に恥を蒙るの實は、屢しば黜けらるるも其の國を去らず⑩、海を踏むの節は、千乗も其の情を移すこと莫し⑪。適い去就を矯易せしむとも、則ち相い為にすること能わず。彼の礮礮として名を沽るに類する者有りと雖も、然れども葛埃の中より蟬蛻し、自ら寔區の外に致すは、夫の智巧を飾りて以て浮利を逐う者に異なるか。荀卿言有りて曰く、「志意脩まれば則ち富貴に驕り、道義重ければ

則ち王公を輕んず」と。

『易經』に「遯の示す時期とその意義はまことに大きい」(遯卦)という。また「王侯に仕えることをせず、その生き方を高尚にする」(蠱卦)と言う。だから、堯は天に則る偉大な聖人と称されたが、巢父・許由の高尚な志をまげさせることはできなかった。周の武王はその音楽が美を尽くしたといわれたが、伯夷・叔齊は首陽山に隠れてついに意志を全うした。

それ以後、この流れをくむものはますます多くなった。世を避けて隱遁するという道は同じであるが、そうするに至った考え方はいろいろである。ある者は隠れ住んでその志を求め、ある者は世を回避してその道を全うし、ある者は自分の心を静にしてその躁がしさをおさえ、ある者は危険を去ってその身の安全を図り、ある者は俗世を汚れたものとしてその氣概を動かし、ある者は万事をとるにたらないものとしてその清廉につとめた。

しかしながら、彼らが田野の生活に甘んじ、江海のほとりに憔悴しているのを見ると、必ずしも魚や鳥に親しみ林や草を楽しんでいるわけではない。これはもって生まれた性質がそうさせているというだけなのだ。だから三度退けられるという恥辱を受けた柳下惠は、その國を去らなかつたし、秦が天子になるなら東海に身を投げると言った魯仲連も、諸侯の爵位にその心を動かさなかつた。もしこの二人にその出処進退を取り替えさせようとしても、互いに相手のようにはできない。

こせこせして名声を売ろうとするような者もいるけれども、しかしながらごたごたした雑踏を脱却して、自ら俗世間の外に身をおいたのは、あの智恵と技巧で飾って名利を追い求める者とは異なるであらう。荀子は、「意志が定まって正しく整っていれば富貴などもあなどるし、道義が厚く身についていれば王公の位なども輕視する」と言っている。

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

まず冒頭に『易』の「遯」と「蠱」の二つの卦を挙げて、隱遁の重大さ高潔さを讃美する。そして隱者の型に言及して、①堯の時の許由、②周の武王の時の伯夷・叔齊、③長沮・桀溺（ともに孔子と同時代の人）、④薛方（前漢末の人、『漢書』卷七十二）、⑤逢萌（逸民伝）、⑥四皓（東園公・綺里季・夏黄公・用里の四人、秦漢の際に商山に隱居）、⑦申徒狄（殷の湯王の時の人）、⑧鮑焦（周の人で廉潔の士）、⑨梁鴻（逸民伝）・嚴光（逸民伝）、⑩北人の無恥（舜の友人）、⑪柳下惠（春秋魯の人）、⑫魯仲連（戦国の時の弁論家）などを例に挙げる。なお①から⑫までの人名の大半は章懷太子の注によるものである。うち①⑦⑨は、讓位を拒否した人。また⑤⑧は「逸民伝」に見える。また聖王の堯、武王も一目おいた存在だと言ひ、『論語』『莊子』などの『隱居』『隱遁』の典拠を暗に用ひ、『荀子』の高潔の士の言を引用して、隱者、隱遁の価値を主張する。

(二) 漢室中ごろ微え、王莽位を篡う。士の蘊藉なるも義憤甚し①。是の時冠を裂き冕を毀り、相ひ携持して之を去る者②③、蓋し数うるに勝うべからず。楊雄曰く、「鴻冥冥に飛べば、弋者何ぞ篡らんや」と。其の患いを達することの遠きを言うなり。光武幽人に側席して、之れを求むること及ばざるが若くす。旌帛蒲車の微め責る所、嚴中に相ひ望む。薛方・逢萌④の若きは聘すも至るを肯ぜず、嚴光・周党・王霸⑤は至るも屈すること能わず。群方咸な遂げ、志士は仁を懷き、斯れ固に所謂「逸民を挙げれば、天下心を歸す」か。肅宗も亦た鄭均に礼し、高鳳を徵し⑦、以て其の節を成す。自後帝の德稍や衰え、邪孽朝に当たる。処子耿介にして、卿相と列を等しくするを羞じ、乃ち抗憤して顧みず、多く其の中行を失うに至る。蓋し其の塵を絶ちて反らず、夫の作す者⑧に同じきを録し、之れを此の篇に列す。

漢王朝が中ごろに衰微し、王莽が帝位を篡奪した。心穏やかな士もはなはだ義憤を感じた。当時、冠を裂き冕を破り、互いに手を

取り合って朝廷を去った者は、数えきれないほどであった。楊雄は「鴻が見えないくらいの高処に飛べば、弋を射る者も取ることはできない」と言っているが、これは禍から遠く離れることを言っている。

光武帝（二五—五七在位）は隱者のために自分の席を空けて、鮑くことなくこれを探し求める姿勢を示した。賢者を招くための旌旗や帛の束、蒲車などが、険しい山中を盛んに往来した。薛方・逢萌などは招聘されてもどうしても出てこようとせず、嚴光・周党・王霸は出てきたものの節をまげさせることはできなかった。天下四方はすべて治まり、志ある士は仁心をもった。これこそまことに所謂「逸民を挙げ用いれば、天下の民は心を歸す」ということであろう。

肅宗（章帝、七六—八八）もまた鄭均を礼遇し、高鳳を招聘して、その節を完成させた。それ以降、天子の徳はしだいに衰え、姦臣（宦官）が朝廷の実権を握り、在野の士は固く節操を守って、公卿宰相と席を並べることを羞じ、激高憤慨して政治を顧みず、中庸の行いを失う者が多くなった。

俗塵の世を去って帰らず、かの「作す者七人」と同じような者たちを記録しこの篇に列ねる。

(一) に次いで、王莽から後漢以後、光武帝・章帝（肅宗）、それから以後の後漢末までの隱者について述べる。①桓榮（『後漢書』卷三十七・列伝二十七）、②胡広（『後漢書』卷）、③詹桓伯（春秋時代、昭公の時の人）、④薛方・逢萌（一の④⑤）、⑤嚴光・周党・王霸（逸民伝）、⑥鄭均（『後漢書』卷二十七・列伝十七）、⑦高鳳（逸民伝）などの人を例に挙げる。

③及び④の薛方を除けば、④の逢萌、⑤の嚴光・周党と⑦の高鳳は「逸民伝」に、①②⑥は『後漢書』の他の列伝に見える。また前漢末の楊雄が賢者を鴻にたとえた『法言』の語を引用し、最後に『論語』

憲問篇の「作す者七人」⑧と同格の人たちを列記したと結ぶ。七人とは長沮・桀溺・丈人・石門・荷蕢・儀の封人・楚狂接輿である。

○『後漢書』方術伝の「序」及び「論」

「逸民伝」に続いて、『後漢書』方術列伝上の巻頭の「序」を挙げ

(一) 仲尼は、易には君子の道四つ有りとし、曰く、「卜筮は其の占を尚ぶ」と。占なる者は、先王の禍福を定め、嫌疑を決し、神明を幽賛して、遂に來物を知る所以の者なり。夫れ陰陽推歩の学の若きは、往往にして墳記に見ゆ。然れども神經・怪牒・玉策・金縷は、明靈の府に關局し、瑤壇の上に封騰せる者にして、得て闢うこと靡きなり。乃ち河洛の文、龜龍の図、箕子の術①、師曠の書②、緯候の部、鈴決の符に至りては、皆な冥蹟を採掘し、人区を參驗する所以にして、時に聞くべき者有り。其の流に又た風角③・遁甲・七政・元氣・六日七分・逢占④・日者⑤・挺專・須臾・孤虚の術及び、望雲省氣、推處祥妖有りて、時に亦た以て事に効有るなり。而れども斯の道隱遠、玄奥にして原難し。故に聖人は怪神を語らず、性命を言うこと罕なり。或いは末を開きて其の端を抑え、或いは辭を曲げて以て其の義を章らかにす。所謂「民は之れに由らしむべし、之れを知らしむべからず」。

仲尼(孔子)は、『易』には「君子の道が四つある」と述べ、「卜筮は占を尚ぶ」と言った。占とは、先王が禍福を定め、懷疑を決し、神明の助けを得て、ついには未來を知る拠り所である。

そもそも陰陽推歩の学などは、往往にして古典に見えている。しかし、神經・怪牒・玉策・金縷などの不思議な事を記した書物は、明靈の府に閉ざされ、瑤壇(仙境)に封じられているものな

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

ので、窺い知ることにはできない。河図・洛書の文、龜龍の図、箕子の術、師曠の書、七経の緯書や『尚書中候』の類、『玉鈴篇』『玄女六韜要決』の符(おふだ)などに至っては、すべて奥深いところを探り抜き出し、人域を考察するものであり、時には聞くことのできるものがある。

その流れには更に風角・遁甲・七政・元氣・六日七分・逢占・日者・挺專・須臾・孤虚の術、そして望雲省氣、推處祥妖があり、時にはまたある事に対して効驗をもたらしうことがある。

しかしこの道は奥深く、玄妙で探求し難い。だから聖人は怪力乱神を語らず、めったに性命の事を言わなかった。或いは末梢のみを公開して端緒を抑制し、或いはことを婉曲にして本義を章らかにした。それは所謂「民はそれに従わせるべきであり、民にはそれを知らせるべきではない」ということなのである。

冒頭に『易』の「繫辭伝」及び「説卦」のことは(孔子)を引いて、卜筮には《占》を尊重することを述べ、王が神明の力に助けられて未來を知る方法なのだと言説する。しかし、「逸民伝」とは異なり人よりも《占》に重点がおかれている。したがってここで挙げられる例は、人としては①箕子(殷の紂王の一族、五行陰陽の術)、②師曠(春秋時代の晋の樂師、占者)、③郎顗(『後漢書』卷三十下・列伝二十下)、④東方朔(前漢武帝の時の人、占者、『漢書』卷六十五)、⑤司馬季主(占者、『史記』卷百二十七、日者列伝)の五人であり、いずれも《占》術を行うが、同時代の「方術伝」に列する者の例は挙げていない。

また①②以外は、章懷太子の注によるものである。しかし《占》の種類、方法に関しては歴代のものを含めて当時知られていたものが羅列されている。陰陽推歩、神經、怪牒、玉策、金縷、河洛の文、龜龍の図、箕子の術、師曠の書、緯書、尚書中候、玉鈴篇、玄女六韜要決、さらに風角、遁甲、七政、元氣、六日七分、逢占、日者、挺專、須臾、孤虚、望雲省氣、推處祥妖、などと書物や實際の術の名などを挙げる

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

が、これらの実態については一部を除きよく分からない。そして、この道を隠遠玄奥と称し、『論語』の言を引いて「行わせるが本義は教えない」と、方術の道を解説する。

(二) 漢の武帝頗る方術を好みてより、天下の道芸を懷協するの士、策を負い掌を抵ち、風に順いて屈らざる莫し①。後王莽矯りて符命を用い、光武尤も讖言を信ずるに及び、士の時宜に赴趣する者、皆な駢馳穿鑿し、争いて之れを談ずるなり。故に王梁・孫咸は名図讖に应じて②、越えて槐鼎の任に登り、鄭興・賈逵は附同するを以て称顕せられ③、桓譚・尹敏は乖忤するを以て淪敗す④。是より習いて内学と爲し、奇文を尚び、異教を貴ぶこと、時に乏しからず。是を以て通儒碩生、其の姦妄不經を忿り、奏議慷慨して、以て宜しく蔽擯せらるべしと爲す。子長も亦た「陰陽の書を觀るに、人をして拘われて忌むこと多からしむ」と云うは、蓋し此が爲なり。

漢の武帝(前一五九—八七)が大いに方術を好んでから、天下の道術を身に備えている士は、秘策を待んでこぞとばかりに手をうって、すべてが世の風潮になびいてやってきた。その後王莽(前四五—後二三)は偽って符命を利用した。

光武帝(二五—五七在位)が特に讖言を信じるようになると、時勢に合わそうとする士は、みな自由勝手にこじつけて、争ってこれを議論した。そのため王梁・孫咸はその名が図讖(図讖符命の書)に符合するといふので三公の位に拔擢され、鄭興・賈逵(三〇—一〇一)はこの風潮に同調したので權勢を得、桓譚(前二四—後五六)・尹敏は帝にさからったので失脚した。

これ以後これらは内学といひならわされ、奇妙な文や奇異な数を貴ぶ者が当時少なくなかった。そこで優れた儒者・学者たちは、その欺瞞と不經(正統ではない)を怒り、上奏文を奉って悲憤慷慨し、すべて排斥されるべきだと願った。

子長(司馬遷、前一四五—前八六)もまた「陰陽の書物を觀ると、人に拘泥させ禁忌させるところが多い」と言っているのは、このためである。

(一) に次いで、前漢の武帝以後、王莽、光武帝から後漢末にいたるまでの方術の流れを述べる。ここでは、①少翁・樂大(武帝の時の人、『漢書』卷二十五上・郊祀志上)、②王梁・孫咸(『後漢書』卷十二・列伝十二)、③鄭興・賈逵(『後漢書』卷三十六・列伝二十六)、④桓譚・尹敏(『後漢書』卷二十八・列伝十八上、『後漢書』卷七十九上・儒林伝六十九上)など、①以外はすべて光武帝の時の者を挙げる。そして『内学』と称した風潮に対して、当時の儒者たちの猛烈な反発と批判の的になったと解説する。

(三) 夫れ物の偏る所、未だ蔽う無きこと能わず、大道と云うと雖も、其の蔽或いは同じからん。若し乃ち詩の失は愚、書の失は誣なれば、然らば則ち数術の失は俗を詭るに至れるか。如令溫柔敦厚にして愚ならざれば、斯れ詩に深き者なり。疎通知遠にして誣ならざれば、斯れ書に深き者なり。数を極め変を知りて俗を詭らざれば、斯れ数術に深き者なり。故に曰く、「苟しくも其の人に非ざれば、道虚しくは行われず」と。意者多く其の統に迷い、取遣頗偏し、甚だ流宕過誕なりと雖も、亦た失う有るなり。

中世 張衡陰陽の宗爲り①。郎顗咎 徵最も密なり②。余も亦た班固たる名家なり③。其の徒も亦た雅才偉徳有るも、未だ必ずしも体芸能を極めず。今蓋し其の推変尤も長じて、以て弘く時事を補うべきを糾め、因りて合せて之れを表すと云う。

いったい、物が偏れば、弊害が無いことはありえない。大道といつてもその障害は同じであらう。もし『詩経』の欠点は愚であり、『書経』の欠点は誣であれば、そういうことであれば数術の欠点は世俗をたぶらかすことであらう。もし溫柔敦厚であつてし

かも愚でないならば、それこそ『詩經』に深く通じた者であろう。疎通知遠であつてしかも誣でないならば、これこそ『書經』に深く通じた者であろう。

数理を極め未来の変化を知つてしかも世俗をたぶらかさないならば、これこそ数術を深く修めた者であろう。

だから「真にそれにふさわしい人物が行うのでなければ、ただ道だけが行われることはない」と言われている。

思うに、多くの人は緒口で迷つて、信じる者と信じない者とは極端に偏っている。甚だ放縱で度を越してでたらめであるのもまた間違っているであろう。

後漢の中葉において、張衡は陰陽の宗師であつた。郎顗は天の下す災兆に最も詳しかった。その他にもまた明々たる名家があつた。その弟子たちもまた立派な才能と優れた徳を有していたが、必ずしも技芸才能を体得し尽くしてはいなかった。

今未来を予知することに最も長じ、時局の事に広く裨益することのできる者を集め、合わせて顕彰することとする。

最後の締めくくりとして、偏向を戒めて未来の変化を正しく知り教えることが重要だと述べて、『易』繫辞のことばを引用し「ふさわしい人」が行うことが肝要だと結論する。そして①張衡（『後漢書』卷五十九・列伝四十九）、②郎顗（『後漢書』卷三十下・列伝二十下）、③襄楷（『後漢書』卷三十下・列伝二十下）・蔡邕（『後漢書』卷六十下・列伝二十下）・楊厚（『後漢書』卷三十上・列伝二十上）などの名を挙げ、これらの者を名家と称して評価するが、以後の者には問題があつた、と結んでいる。

次に、「方術列伝」上の巻末に載せる「論」を挙げる。

（四）論に曰く、漢世の所謂名士は、其の風流知るべし。弛張趣舍、時に未だ純ならざること有りと雖も、情を刻み容を修むるに於いて、

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

道芸に依倚して、以て其の声価を就す。能く物方に通じ、時務を弘むる所に非ざるなり。樊英・楊厚①を徴するに及びて、朝廷神明に待するが若く、竟に至りては其の異無し。英は名最も高くして、毀最も甚だし。李固・朱穆②等以為えらく、処士純ら虚名を盗み、用いるに益無しと。故に其れ然る所以なり。然るに後進之れを希いて以て名を成し、世主之れを礼して以て衆を得。其の無用を原めれば亦た用為る所以なり、其の有用に則れば或いは無用に帰す。何を以てか之れを言う。夫れ煥乎たる文章、時に用に乖くこと或り、本乎たる礼楽、末に適きて疎たること或り。其の摺紳を陶し、心性を藻し、之れに由りて知らざらしむる者に及びては、豈に道用表に遜かにして、之れ数跡に乖くに非ざるや。而して或る者は不踐の地を忽せにし、無用の功を餘かにし、乃ち遠術を誚諫して、国華を賤斥するに至りては、以為えらく力詐は以て淪蔽を救うべく、文律は以て寧平を致すに足り、智は猜察に尽き、道は法令に足ると。万世に済ると雖も、其れ將に夷狄と同じからんとす。孟軻に言有りて曰く、「夏を以て夷を變ず。聞かず、夷に夏を變ずるを」と。況んや未だ済らざる者有るをや。

論に曰く、漢代の名士といわれる人々は、その風流を知ることができる。

志向をのばせるものもあり、のばせられないものもあり、時に用いられるものもあり、用いられないものもあつて、一樣ではない。心情を厳正にし、容儀を修養することにおいて、道術にたよつて名声を得たのであり、物の変化の道理によく通じ、時のつとめを広めたからではない。

樊英や楊厚を招聘するに及んでは、朝廷は神明に待するようであつたが、ついには彼らは特にすぐれたところはなかった。樊英の名声は最も高かつたが、誹謗も最も甚だしかった。李固や朱穆たちは、隱遁の処士というのは専ら虚名を得ているだけで、世の役にたたない。だからそうなる理由だったのだと考えていた。

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

しかし、後進の者たちはこうなることを願って名を挙げ、君主は彼らを礼をもって待遇し、人心を得ることができた。無用の根源をたずねるとまたそれは用であり、有用ということに則ればあるいは無用に帰結する。どういうわけか言うのか。

そもそも輝かしい立派な文章も、時には用いられぬこともある。すべての根本である礼楽も末代になると廃れてしまうこともある。士大夫を育成し精神を養い育て、性情を陶冶し、これに従わせはするがわからせるようにはしないものにとっては、文章や礼学という道は日常から離れて、数術の理に違背するのではないだろうか。

そしてある者は足を下ろしていい地をゆるがせにし、無用の功を遠くのものにしている。日常から遠い礼学をやかましく誇り、国華である心に道をおもう隠逸の士を侮って斥けるということになると、詐謀と武力が没落衰敗を救うことができ、法律は太平の世にすることができ、智とは疑い察することに尽き、道というのは法令で充分であると考え。これでは万世にわたるといっても、夷狄と同じになってしまう。

孟軻にこういう言葉がある、「中華で夷狄を感化する。夷狄に中華を変えろということとは聞いたことがない」と。ましてやまだ万世にわたっていない者にあつてはなおさらである。

この「方術伝」の最終論は極めて難解であり、解釈の分かれるところであろう。すなわち《方術》肯定論なのか否定論なのか判然としないう。方術者として①樊英（方術伝）・楊厚（序）の③を挙げ朝廷は彼らを重用したが実際には大したことはなかった、と言ひ、②李固（後漢書）巻六十三・列伝五十三・朱穆（後漢書）巻四十三・列伝三十三は、彼らを無益の存在だと批判した、と述べるが、その後、の莊子の「用無用」による論の展開は、《礼学》や《文章》だけでは十分ではないが、隠逸関係のものをすべて排除するとそれも問題だと

いう。《智》は猜察に終わり《道》は法令で事足りる、となれば、夷狄であつて中華ではない。そうあつてはならないとの総括的な主張が結論なのだが、《方術》に対するものとして《礼学》と《文章》を對比させ、どちらかだけで善しとする論理ではない。

ただし『孟子』の《夷狄》《中華》論を用いたのはなぜであろうかとの疑問は残されるように感じる。先に触れた莊子の《用》《無用》の転換の論理を、《方術》と《礼学》《文章》の關係に應用させ《方術》の存在理由を解説したのである。「序」に言う「隱逸玄奥」の世界を説明することは困難であり、むしろ問題は「この世界を《術》とする人間にあるのだ」というのが、范曄の主張ではないだろうか。

○

本稿は、「逸民伝」と「方術伝」について概容を述べることが主要な目的であつた。この両伝の比較を試みようと考えたが、それは無意味でもあり必要の無いことかも知れない。なぜなら、《逸民》と《方術》は同じ範疇に属するものではなく、したがって「逸民伝」と「方術伝」の比較は不可能といえるだろう。ただ数のうえから言えば、「逸民伝」は約十七人、「方術伝」は上下合わせて約四十一人、二倍の差があることは、《逸民》に認定されるのはやはり少数だということである。またこの両伝に共通する点があるとすれば、社会や現実からは遠い存在だということであろうか。がその存在価値は両極に位置するものであり、決して互いに交差することの無い世界である。

《逸民》は《隱逸》、《方術》は《方技》と名称を変えて、正史の中に生き続けてきたのである。この両伝の存在に不審と興味を持ったことが出発点となり、まずこの「方術」「逸民」を読み解く作業を始めたのだが、五年の歳月が流れてなおいまだ完成の域に達していない。そこで両伝の概容を把握するために、編者范曄がかなり苦心をして執

筆したのである。『序』『論』について考えてみようしたのである。

本文は紙数の関係から原文を省略したが、訓読及び和訳は、遅々たる歩みながら重ねて来た研究会「夕陽舎」の現在での成果を若干補筆訂正したものである。図らずも最近になって『後漢書』の注釈が月刊に近い形で刊行され始めている。この両伝の注釈は極めて難しく、どのような内容なのか刊行が待ち遠しい。

〔注〕

※本文のもととなった『後漢書』の原文は、紹興本を底本とする標点本『後漢書』（中華書局出版、一九六五年）による。

(1) 『後漢書』百二十卷は、「本紀」十卷・「列伝」八十卷は南朝宋の范曄撰、「志」三十卷は西晋の司馬彪の『統漢書』から刪取したもので、「紀・伝」には唐の章懷太子の注、「志」には梁の劉昭の注が付されている。范曄は『東漢觀記』その他の後漢の史書を選択採取して『後漢書』を撰した。

(2) 華佗は、『三国志』卷二十九の『魏書』二十九にも伝がある。

(3) 論に曰く、先大夫宣侯、嘗て講道の余隙を以て、逸士の篇に寓す。高文通の伝に至りて、輟めて感有り、以為えらく隱者なりと。因りて其の行事を著して之れを論じて曰く、「古者の隱逸、其の風尚し。潁陽に耳を洗いて、禪讓を聞くを恥じ①、孤竹長く飢えて、周の粟を食むを羞ず②。或ひとは高く棲みて以て行を違え、或ひとは物を疾みて以て情を矯り、軌迹区を異にすと雖も、其の去就は一なり。伊の若き人は、志は青雲の上を陵ぎ、身は泥汗の下に晦み、心名すら且つ猶お顕れず、況んや怨累を之れ為さんをや。夫の体を淵沙に委ね③、弦を鳴らして日を擗る者④、其れ遠からざらんや。論に言う、亡父の金紫光禄大夫宣侯は、かつて道を講義する余暇に、逸士の篇に心を傾けた。高文通伝に至ると、読むのをやめて感じるところがあり、隱者だと思った。

そこでその事跡を書き、論じて言うには「昔の隱逸は、その氣

『後漢書』の「方術列伝」・「逸民列伝」について

風がはなはだ高尚である。潁陽（潁水の北）に隠れた許由は耳を洗って、堯が帝位を譲ろうと言うのを聞いたことを恥じ、孤竹君の二子の伯夷・叔齊は長く飢えたが、周の粟を食べるのを羞じた。ある者は志高く隱棲して人とは異なる行いをし、ある者は外物を嫌悪してわざと人の情と違うことをするが、事迹は異なっているも、その去就は同じである。このような人は、志は青雲の上になお高くあって、身は泥の下にせずみ、姓名でさえも明らかではなかった。ましてや積み重なった恨みなどはあったらどうか。あの汨羅の淵に身を投げた屈原や、処刑に臨んで琴を弾き日影を測った嵇康などとは、大いに遠く隔たっているまいだろうか。この中に「隱逸」の語が見える。ここにもやはり、①許由、②伯夷・叔齊、③屈原（戦国楚の懷王の大夫）、④嵇康（三国魏の人、竹林の七賢）を例に挙げて隱者を高く評価している。

(4) 「逸民」の語は、『論語』堯曰篇に「滅びたる国を興し、絶えたる世を継ぎ、逸民を挙げれば、天下の民心を帰す」、『漢書』成帝紀に「故に官に廢事無く、下に逸民無し」、『論衡』順鼓篇「絶世を継ぎ、逸民を挙げ」、西晋の潘岳の「閑居の賦」（『文選』卷十六）に「身は逸民に斉しく、名は下士に綴る」などがある。

(5) 「隱逸」の語は、『後漢書』卷七十三・列伝第七十三逸民列伝の高鳳伝に「論に曰く……古えは隱逸、其の風尚し」、『後漢書』卷十七・列伝馮岑賈列伝の岑彭伝に「曾孫の杞、魏都の太守に遷り、隱逸を招聘し、政事に参与せしむるに、無為にして化す」などが見える。また「逸士」の語は、『後漢書』卷七十三逸民列伝、高鳳の伝に、「論に曰く、……逸士の篇に寓す。」とある。

(6) 『史記』卷六秦始皇本紀に「悉く文学方術の士を召すに甚だ衆し」、『漢書』卷四十四、淮南王劉安伝に「賓客方術の士数千人を招き致す」、枚乗の「七発」に「將に太子の為に方術の士の資略有る者を奏して」などに見える。

（本学教授）